んばかりでなく、スタッフ五〇名、空色のシャツに包まれた学童保育センターの方々が走りまわられ、運営してくださいました。

素晴らしい沖縄集会。加藤彰彦氏（四月から沖縄大学学長職）を囲んでおられる得がたい方々が生み出した成果といっても過言ではありません。

（日本子どもを守る会・高柴光男）

日本発育発達学会第八回大会（山梨大会）に参加して

桜の蕾もまちにまったかのように、春の日差しを浴びて、開花しはじめた三月末日（三／二七・二八）。山梨大学甲府キャンパスにて、日本発育発達学会第八回大会（大会長・中村和彦：山梨大学）：大会テーマ「こころとからだ、育ち……、みつめて……」が開催されました。この学会は、研究諸機関の会員だけでなく、日頃から乳幼児や小学生・中学生・高校生・大学生に関わり教育実践を施している実践家（現場の先生）の会員が多く、幅広い年齢段階の子どもを対象とした話題や、多角的な研究・実践が行われています。

ここでは、大会二日間の様子を、一部ですが、紹介したいと思います。

〝「五快」のすすめ〟

初日、「子どものライフハザード～睡眠・食事・排泄～」というテーマのシンポジウムⅠでは、一九七〇年代から一九八〇年代の子どもたちの写真（荻野矢慶記：写真家、『街から消えた子どもの遊び』。大修館書店、一九九四）が数々映し出され、公園や路地、土手などで遊びに夢中になる子どもたちのウキウキした表情の〝子ども本来の姿〟に、会場の雰囲気が和みました。この後、コーディネーターである瀧井宏臣氏（ルポライター）から、わが子の子育て体験のときに感じた〝子どものおかしさ〟をきっかけに、その事実を探るために取材され、この三〇年余りの子どもの様子・現状として、体力低下、自律神経系異常（体温変化の異常）、免疫系異常（アレルギーの増加）・内臓／血管系異常（小児生活習慣病予備軍の増加）などの〝子どもの現実の姿〟の報告があ

り、〝子どものからだ・こころ・生活の乱れ・危機〟を〝ライフハザード（生活の崩壊）〟と名づけられた問題提起が述べられました。

これらの諸問題を食い止め、改善するための取組みとして、〝三快のすすめ〟が三名のシンポジストより提言されました。

まずはじめは、神山潤氏（東京ベイ浦安市川医療センター）が、日本の子どもの睡眠事情や睡眠と生体時計（概日リズム）の関連などを述べられ、ある調査の結果から、「不規則な生活（朝寝坊・起床／就寝時刻の変動幅が大きい）をしている子どもほど、問題行動を増大させる方向に作用することを示唆する」と報告されました。この調査結果は外国にも発信され、「幼児を二三時以降に寝かせることや二一時以降に外出をさせることなど、理解できない！この結果には、特殊な社会文化的な背景の差異があるに違いない！」との意見がよせられ、神山氏は「日本の状況が世界の常識とは大いにかけ離れていることを思い知らされた」と述べ、私たちおとな自身が睡眠の重要性を理解すること、**「快眠のすすめ」**を強調されました。

次いで井上留美氏（日本ケロッグ株式会社）が、〝おやつ〟による脂質の過剰摂取や〝肥満〟の要因には、親子の関係性や朝食欠食が影響するなどの日本の子どもの食生活に関する問題点を述べられました。一方で、食卓には五色（赤・黄・白・緑・黒）の食物をそろえることが栄養バランスのとれた望ましい食事になると、**「快食のすすめ」**を提言されました。

さらに、加藤篤氏（NPO日本トイレ研究所）は、からだの健康のバロメーターとして排泄に着目し、〝うんち教室〟の実践報告から、「食べる、動く、眠ることが上手くいってこそ、いいうんちができる」と、食と健康やからだの学習を、日常の意識・行動の改善に結びつけようとする**「快便のすすめ」**を提言されました。

最後に、コーディネーターの瀧井氏は、からだと心の発達に不可欠な〝遊びと運動〟を保証しようとする「**快活のすすめ**」と、気持ちの健康が元気の表われであるとして「**快笑のすすめ**」を加え、〝**五快のすすめ**〟を提言されました。

その後の討論では、「生活様式の変化に伴い、子どもがそうしたくてもできない社会的要因が最大の問題である」や「生活様式の改善がキャンペーン化してしまっていること」への懸念から、「子どもたち自身が、自分のからだの声を聞き、様子を知り、健康になるために主体的に行動するようになることが大切である」などの意見が交わされました。

〝いきいき実践の創造〟

二日目、参加者による一般報告は、約八〇演題の発表がありました。発育・発達、健康、運動に関する基礎的な研究報告や、前日のシンポジウムの〝五快〟実践の手がかりになるような実践研究が報告されました。今大会に参加して感じたことは、教育現場からの実践研究が数多く報告されているということです。報告者の多くは、実際に子どもたちに関わりながら、子どもたちの様子・現状・問題を捉え、目の前の子どもたちを、いきいきさせる方法はないか、と指導に工夫を凝らし、実践課題の追究と実際の子どもたちの様子が、目に浮かぶような熱い議論を繰り広げていました。

さらに報告者と参加者との議論からは、互いに課題を共有し、さまざまな取組みにより、効果的な実践へと発展させ、その成果が証拠となり、確かな事実へと結びつけようとする、まさに積み重ねの研究であり、子どもが元気になることを願うおとなたちの熱意を強く感じました。

日頃、職員室で、「最近、子どもたちの様子が気になるのよ……」という話題に、「そうね。うちのクラスでも……」「授業に集中していないようで……」「朝からグッタリ……」「何かイライラしていて……」などの会話が聞かれます。これらの実態は、子どものからだ・生活のハザード・サインであり、何らかの原因が育ちを妨げているのでは？と、仲間の先生たちと共通理解し〝快（睡・食・便・活・笑）〟実践をすすめてみようと思います。皆さんの職員室では、どんな子どもの話題（サイン）がありますか……？

（富川敬子）